

村上海賊の盛衰

1. 瀬戸内海の家賊とは何か

先ず家賊とは何かです。日本国語大辞典によりますと、その定義は「海上を横行する船舶や、時には沿岸の集落を襲ったりして財貨を略奪する盗賊、家賊人」となります。

家賊で有名なのは、ヨーロッパではバイキング、イギリスの家賊、日本近海では倭寇わこうが有名です。

今回取り上げますのは家賊は家賊なのですが、定義とはいくらか違う日本の瀬内海の家賊であります村上家の盛衰を語りたと思います。

瀬戸内海の家賊は元々は漁労や海上運送業を営んでいたのですが、古代・中世から中国筋や四国筋の大名や領主間の争いで船と共に徴用される仕事にも従事するようになりました。

見返りとして大名・領主から島々の入江・津の支配権とともに島の入江・津に寄港の商船への入港料を取る権利を取得しました。

そこからエスカレートして島に寄港しないで、ただ島のそばを通航するだけの船にも通行料を取ります。これを関銭せきせんと称します。

領主は表向きは認めていないのですが、戦いがあれば水軍として協力させなければならぬので、暗黙に許可します。

関銭を払わない船には攻撃してすべての荷物を分捕ります。抵抗すれば殺します。

これが瀬戸内の家賊と称せられた人たちです。

古代の朝廷も反乱軍への鎮圧に徴用し、戦国時代には戦国大名が水軍として利用しました。当時は警固衆と言われていましたが、ここでは馴染みやすい水軍と称します。

2. 瀬戸内海の家々と家賊の発生

家賊は家々に拠点を持ちます。

瀬戸内海に家賊が興隆したのには更に理由があります。

それは海域、地勢です。

瀬戸内海は本州西部、四国、九州に囲われた日本最大の内海です。

3000余の島、その中で外周100メートル以上の島が700余、内有人島が300余あります。

大きな島としては淡路島（兵庫県）、小豆島（香川県）、屋代島（広島県）、倉橋島（広島県）、大三島（愛媛県）が知られています。

特に広島県と愛媛県の間には島が密集しています。300位あります。

飛行機から見ますと、島の上に海が見える感じです。中国・四国大橋の今治ルートをしまなみ海道と言っていますが、良く表しています。

連絡船で尾道・三原から今治に向かうと島々が重なりあっており、島々はそれぞれ複雑な入江をもっており、進んでいる船が航路を走っているのか入江に向かっているのか分かりません。

古来から近世まで瀬戸内海を運行する船はこの島を目印に、島と島とをくぐり抜け進みました。

瀬戸内海の瀬戸の意味は海が狭くなっているところです。

瀬戸内海の子賊が発生した理由はこの複雑な島の海域にあります。

島の隠れた入江に潜み、船が島と島との間の海峡を通航する時にぱっと現れ、補足すのです。関銭を出さないで、反抗すると船ごと没収です。乗組員が殺されることもあります。

さらにこの海域に海賊が横行するのには、瀬戸内海の中中部、西部の島々へ中国・四国の領主（国司、大名等）の統治力（警察権）が本土より弱かったこともあります。

陸続きでない多くの島々、複雑な入江で完全な統治が難しかったのです。

ここに海賊の発生と興隆の理由があります。

特に上述しましたように広島県と愛媛県の間、そして山口県と愛媛県の間の子が群島となっており、古代より大規模な海賊が横行しました。

3、村上海賊の前期

その筆頭がここで取り上げます村上海賊です。

村上氏は戦国時代に伊予国の能島^{のしま}（愛媛県今治市）、来島^{くるしま}（愛媛県今治市）

と因島^{いんのしま}（広島県尾道市）に本拠を置く最大の海賊でした。

ここで瀬戸内海の子々の様子をもう少し詳しく語ります。

添付瀬戸内海略図と芸予諸島略図をご参照下さい。

瀬戸内海の諸島群の分布を、備讃瀬戸諸島、芸予諸島、防予諸島に分けます。

瀬戸内海東よりの備讃瀬戸諸島は備前・備中（岡山県）と讃岐（香川県）の間にある諸島では塩飽諸島しわくが知られています。塩飽の海賊衆、海上運送業者は古来から活躍しています。

瀬戸内海中部には芸予諸島です。備後・安芸（広島県）と伊予（愛媛県）の間にある諸島です。

尾道・三原から対岸の愛媛県今治いまばりまで有人島が25、無人島が30あり、海面より島の合計面積の方が大きいのではないのでしょうか。

比較的大きな島は、因島いのしま・生口島いくちじま（広島県）、大三島・伯方島はかたじま・伊予大島（愛媛県）です。周囲800メートル位の小さい島ですが村上海賊の本拠地

として有名な能島のしま・来島くるしま（愛媛県）もこの海域にあります。

西寄りには大崎上島・下島・上・下蒲刈・倉橋島・能美島・江田島（広島県）があります。

瀬戸内海西部には防予諸島です。周防（山口県）と伊予（愛媛県）の間にある諸島です。忽那島くつなじま（愛媛県）、屋代島（大島）（山口県）があります。

芸予諸島、防予諸島が村上海賊の縄張りで、盛期には塩飽諸島（讃岐―香川県）も傘下にしていました。

特に芸予諸島と防予諸島は航路の要衝で多くの海流が早い難所がありました。

主な難所即ち海賊の拠点の島がある所です。

難所は海峡、水道、瀬戸です。

来島海峡（今治波止浜と伊予大島の間）、尾道水道（尾道と向島の間）、瀬戸水道（生口島と高根島の間）、船折瀬戸（伯方島と鶴島の間）、鼻栗瀬戸（伯方島と大三島の間）などが有名です。

能島のしま（愛媛県今治市大島の北）に本拠を置く村上を宗家に、来島（来島海

峡)に本拠を置く村上、因島(尾道市沖合)に本拠を置く村上があり、三島^{さんとう}村上と言われました。

この三家の盛衰を語る前に村上氏の略系図を見てみましょう。

村上源氏の出とも言われていますが、はっきりしません。12世紀の半ば平安時代後白河法皇時代に伊予国(愛媛県)の名門で実力者河野氏を頼って伊予にやって来ます。河野氏の水軍部門を任されていたのでしょう。

この後河野氏の家来として行動をとものにします。海賊行為もしていたでしょう。

源平合戦では源頼朝に味方しました。その後の承久の乱では北条に反し、官方に味方したため、勢力を減じましたが、元寇では活躍し復活しました。

後醍醐天皇・足利尊氏 VS 鎌倉の北条氏では後醍醐・尊氏に味方し河野氏は伊予守護になりました。

海賊で河野水軍の大將の村上義弘の活躍によるものです。

ところがその後の後醍醐と尊氏の対決では、河野氏は尊氏に、村上義弘は後醍醐に味方と分かれしました。しかし河野氏は尊氏一門の細川氏と仲たがいし、義弘は尊氏の勢いが増し、九州に逃げざるを得なくなり、伊予での河野氏と村上家の勢力は大幅減となりました。

その後河野氏と村上家は協力して伊予奪回に成功します。南北朝時代に入ります。

ところが南北朝時代の1369年村上義弘の消息が途絶えます。村上氏の史伝が一旦終わります。ここまでを前期村上史と呼ばれます。

4, 村上海賊の後期

前期村上家義弘の後は養子の師清^{もろきよ}が継いだことになっています。

北畠顕家の子と言っていますがはっきりしません。ここから後期村上家と言われます。

師清後は、子の3人が受け継ぎます。義顕^{のしま}が能島を本拠に、顕忠^{くるしま}が来島を

本拠に、顕長^{いんのしま}が因島を本拠に定めました。

三島村上^{さんとう}と称せられます。宗家は能島ですが、三家は必ずしも連合でなく、

同一行動を取らないこともあります。最大勢力は能島村上家です。

南北朝時代が終わり室町時代の瀬戸内海の勢力の様子です。

中国地方西から長門国（山口県）、周防国（山口県）、安芸国（広島県）は大内氏、備中（岡山県）、備後（広島県）は細川氏、四国は阿波国（徳島県）・讃岐（香川県）は細川氏、伊予（愛媛県）は河野氏、九州は豊前（福岡県）は大内氏、豊後（宮崎県）は大友氏の構図です。

これが戦国時代に入りますと、豊前、長門、周防、安芸は大内氏から毛利氏に移り、備後は小早川氏になります（後に毛利傘下に入る）。讃岐、阿波は三好氏の地盤へ、豊後は大友氏で変わらずです。

要するに瀬戸内海の陸地の勢力図は、戦国時代に入り中国地方（九州の門司側を含む）は、大内氏から毛利氏へ、四国は讃岐、阿波は細川氏から三好氏へ、九州の豊後の大友氏は変わらず、伊予は中部（松山、今治）と東予（新居）は何とか河野氏と言ったところです。

そして戦国時代の終盤には豊臣秀吉が日本全体の統一政権を樹立し、瀬戸内海の統治の基本方針がでます。後述します。

村上海賊も瀬戸内海を完全に支配していたわけではありません。その時代、その時の実力ある上記大名（河野、大内、小早川、毛利氏等）に水軍として雇われる立場でした。その見返りとして海賊行為を黙認されていたのです。

村上家は上述のように15世紀の初め頃三家に分かれます。室町時代、それぞれ海賊行為をしながら海域の縄張りを広げます。三家の連携はあったでしょうが、それぞれ一家は独自路線を取ります。

戦国時代には来島村上家は旧来からの主筋の伊予の河野氏の家臣の立場です。

因島村上家は河野氏から早くから離れ、対岸の備後国の領主である小早川氏の家臣化しています。宗家の能島村上は、河野氏を主筋として立てながら大内氏、その後の毛利氏と関係を持ち、自立性が強い海賊衆となっています。

5、村上海賊の宗家能島村上武吉の時代

（1）村上武吉

戦国時代の三島村上の盛衰を能島村上の当主武吉を中心に見てみます。

武吉（たけよし 掃部頭）は能島村上家（かもんのかみ のしま）の5代当主、天文2年（1533）年誕生、慶長9年（1604）72歳没。

武吉の長男は元吉、二男景親と娘がいます。二人の息子は強者として海戦で活躍します。史実です。

娘は黒川なにがしと結婚したのですが、彼女の活躍や黒川氏が何者か記録がないようです。

しかしこの娘（姫）を主人公にして2013年和田竜作の小説「村上海賊の娘」が出版され本屋大賞をとる人気の読み物となりました。

毛利軍と織田信長軍が摂津木津川口での海戦です。第一次と第二次があり一次では毛利軍の勝利、二次では織田軍勝利でした。

この海戦に毛利軍として能島村上家も動員され参戦しました。お兄さんの元吉と景親（弟？）の参戦はあったのですが、娘が主役で参戦して活躍するのが小説上の内容です。娘の名は景きょうとなっています。

（2）三島村上と毛利氏

毛利氏に勢いがあり、大内氏が滅亡の後の陶氏すえと戦い勝利し、毛利氏が大内氏の中国地盤（長門、周防、安芸、備後）を掌中に収めます。陶氏との厳島での海戦で三島村上は毛利味方で参戦しました。

開戦前は村上武吉は陶氏派であって厳島への毛利方への参戦が遅れたことで、毛利元就は不満でした。天文24年（1555）のことです。

永禄年間の初めころ（1558～63年）は毛利氏と九州豊後の大友氏と戦いでは武吉は大友氏に付こうとしましたが、結局は毛利氏に味方しました。

その後毛利氏と大友氏は和解します。

元龜の頃（1570年）の毛利と大友のいさかいは再燃します。能島の村上武吉は大友に付きます。一方来島村上、因島村上は毛利に付きます。

武吉は毛利軍（来島村上や因島村上等）に本拠地能島を攻撃されます。

武吉は阿波、讃岐の三好氏や塩飽の海賊衆の支援を得て防戦します。

やがて毛利氏と大友氏は和解し、毛利氏と武吉能島村上も停戦です。

このように毛利氏をめぐって三島村上は来島村上家（河野氏の家臣）、因島村上家（毛利傘下の小早川氏の家臣）は毛利方となり、能島村上武吉は毛利に付いたり離れたりではいわば自立形です。

当時三家の内、能島村上家が圧倒的な勢力で、瀬戸内海中部から西部の海域を制していました。東は讃岐沖の塩飽諸島から芸予諸島、防予諸島の多くを抑えていました。

来島村上家の主人で能島村上家、因島村上家の主筋でもある伊予の河野氏ですが、伊予国の国内の制圧もままならず毛利の支援をも得ていました。

三島村上は河野氏傘下では自分たちの勢力を維持、拡大出来ません。毛利氏の傘下に移り換えていくことになります。

(3) ^{さんとう}三島村上の主筋河野氏

三島村上の元々の主筋になります河野氏についてです。

伊予国は古代6世紀頃は越智氏が^{くにのみやっこ}国造、郡司として地元の統治者でした。

越智氏が衰え、12世紀初めにその分派の河野氏が立ち上がり朝廷から^{じょう}掾（次官の次）の位をもらい地元の実力者になって行きました。

鎌倉時代には源頼朝に味方してお家存続、承久の乱では反幕府官方で本家に代わって庶家の河野家が存続します。

南北朝時代から室町時代は、足利尊氏についたり、南朝についたり、そして細川氏の攻勢、又身内でのお家騒動もありましたが、何とか伊予守護職を確保していました。

戦国時代に入り、伊予国の南側の勢力や土佐の長曾我部氏や讃岐の三好氏に侵攻され、更に又お家騒動がある中、毛利氏、村上家の支援、長曾我部氏との講和によってやっと存立していました。

しかし豊臣秀吉の四国征伐で毛利氏が秀吉方であるにも関わらず抵抗し、最期は降伏し、領地没収、小早川氏にお預けの身分となります。

この後関ヶ原の戦いの折、毛利氏に味方し伊予の加藤嘉明の留守部隊を撃つて失敗、毛利氏も負け名門河野氏はこれでおしまいです。

(4) 大内氏から毛利氏

大内氏は、鎌倉御家人で室町時代から戦国時代まで周防、長門、安芸、

備後、豊前、筑前の守護で中国筋の大大名でしたが家来の^{すえ}陶氏に滅亡させられ

ます(1551年)。

陶氏を滅ぼしたのが毛利氏です(1555年)。大内氏の中国の地盤をすべて収めました。関ヶ原合戦での敗戦まで中国筋は毛利氏の時代です。

因島村上家が主君に仰いだ小早川氏です。

鎌倉時代に地頭として安芸国の沼田^{ぬだしょう}荘に赴任してきて以来地元の有力者となり、戦国時代は尾道、三原と対岸の島を支配していました。毛利氏の進出で毛利氏の三男隆景が養子に入りその傘下に入ります。村上家は因島の拠点化で小早川氏の傘下に入ったのです。

(5) 三島村上と毛利氏—その2—

話は戻って中国筋の大大名毛利氏と能島村上武吉の関係です。

武吉も毛利氏陣営に復帰します。

毛利氏は織田信長と関係が悪化します。

大坂本願寺攻め行っている信長に対抗して、本願寺を援護のために米の搬入を実行します。船団を組んで織田水軍が守る摂津木津川口(大阪府)で衝突し、毛利船団が圧勝します。

第1次木津川口海戦です。天正4年(1576)のことです。

能島村上を筆頭に来島、因島村上も招集され参戦します。

しかし2年後に第2次木津川口海戦では村上水軍も参戦しますが信長軍に破れます。

これ以降補給路を断たれた本願寺は信長に降参します。

信長より三島村上に味方になるように誘いがあります。

来島村上家の当主道房は信長、豊臣秀吉の誘いに乗ります。天正10年(1582)初め頃です。

当時秀吉が岡山の高松城を攻めている頃で、毛利軍は劣勢にありました。能島村上家の武吉と嫡男の元吉も誘いに揺れ動くのですが結局と因島村上家と共に毛利氏に残ります。

村上二家と主筋の河野家などが毛利軍に残り、道房の本拠地来島を攻撃します。

来島は現在の今治市の波止浜と(伊予)大島の間の流れが激しいことで有名な来島海峡の真ただ中にあります。周囲850メートルの小さな島ですが、全島要塞で来島城とも言われていました。

攻撃は毛利軍（能島村上、因島村上）の優勢で進められ、秀吉と毛利氏が講和（本能寺の変で一五八〇年）した翌年まで続くのです。

道房は負け、秀吉の元に亡命し、庇護されます。

来島村上道房の毛利氏、村上二家、河野氏からの離反行為は、秀吉と毛利氏との間で話し合われ講和が成立しますが、道房が来島に戻るのは秀吉の四国攻めの時の天正一三年になってからです。

信長は本能寺で明智光秀に謀殺され、毛利氏はだんだんと秀吉の家臣になっていきます。

（6）豊臣秀吉との関係

この後戦国時代終盤に入り、織田信長そして豊臣秀吉時代と天下は移ります。

秀吉は土佐の長曾我部氏の征伐のため四国攻めを実行します（一五八五年）。ここでは毛利氏はもう豊臣軍として参戦します。

ところが河野氏は長曾我部氏に味方して、秀吉に敵対して毛利氏の家臣小早川隆景（元就の三男）と戦い、伊予で敗戦します。

戦国期後半から毛利氏の支援を得て何とか地盤を支えていたと思われていたのに毛利氏に歯向かう行動に出たのです。

理由ははっきりしませんが、河野氏は地盤の確保のため南の土佐の長曾我部氏にも恩義があったのでしょう。又秀吉嫌いがあったかも知れません。

敗戦の後、河野氏は小早川隆景に庇護されますが、ここで古代から名門の守護大名、戦国大名としての河野氏は滅亡となります。

この四国攻めでは、因島村上家は既に小早川氏（毛利氏家臣）の家来になっていましたので、秀吉、毛利方です。

来島村上家は亡命中でしたが、秀吉方です。

村上宗家の能島の武吉、元吉親子は中立の立場を取ります。主筋の河野氏に弓矢を引けないとの思いであったと言われています。

しかしこれがいけなかったのです。

戦後、伊予国は秀吉の命により備後の小早川隆景（当主の毛利元就の叔父）が大名として赴任してきます。

ここでかの有名な秀吉の海賊禁止令が発布されます。四国征伐の後すぐです。

全ての海賊衆への命令となっていますが、これは「定」の文章からも備後、伊予に縄張りを持つ能島村上への命令書です。「…今後備後・伊予両国の間

にて盗船^{つかまつ}仕^{やから}るの族……」とあり、能島村上家のことです。

天正15年の秀吉の九州征伐（島津氏）には能島村上家も秀吉方で参戦しますが、その後も秀吉は能島村上家の海賊行為を追求します。武吉親子の戦功が不十分だったのかもしれませんが。

武吉も海賊行為をしていない旨弁明しますが聞いてもらえません。

九州征伐後、武吉を弁護していた小早川隆景が筑前、筑後へ転封となった後の天正16年、ついに秀吉から本拠地能島の退去の命令がでます。周防の屋代島（大島）へ移転させられます。

（7）毛利家の家臣化

能島を離れてから能島村上家は毛利氏の完全な家臣となったと考えて良いでしょう。

武吉親子は毛利氏に救われたと思います。毛利氏は秀吉の中国攻めの時、劣勢の毛利に味方してくれたことに恩義を感じていたと思います。

海賊として、水軍として戦国大名に雇われ、主筋とも一定の距離をもって自立的に進み、戦国時代の一時期瀬戸の内海で最大の勢力を誇った能島村上家は一応ここで海賊としての歴史的な存在に終止符をうったと言えます。

この後、毛利氏の下で朝鮮出兵、関ヶ原での毛利の下での参戦を経験しながら、拠点をも6カ所も変えさせられます。

能島一周防屋代島—筑前国^{くにかむり}冠（福岡県前原町）—長門大津郡壁原（日本海側）—竹原（広島県）—周防上関—周防屋代島

周防屋代島には天正16年に能島から移り、又同島に慶長6年（1601）に戻って来て、武吉は慶長9年（1604）に没します。72歳でした

能島を出た時は1万8千石位の領地を伊予、安芸、周防の島々と伊予の海岸沿いに領有し、更に能島時代は商船から通行料を財源にしていました。通行料（海賊行為）は大きいです。船の大きさを基準に又積み荷の10パーセント以上を徴収していたようです。

その後孫の元武が宗家を継ぎ三田尻（山口県防府市）に住み、毛利家の船出衆組頭の役につきました。

この間嫡男元吉は慶長5年の関ヶ原戦いの時毛利氏につき、伊予の加藤喜明留守部隊を攻め、返り討ちにあい、戦死しました。

次男の影親は小早川家に仕え、その後毛利に仕えました。

武吉の息子の二家が江戸時代には存続しました。

来島村上家は秀吉時代は1, 5万石の大名になりましたが、関ヶ原で西軍につき、改易となりました。

福島正則の口利きで正則の家来、ついで紀伊徳川家に仕えました。

因島村上家は海賊時代からも代々小早川氏の家来となっていました、代が養子の秀秋（秀吉が送り込む）になってから毛利氏に移りました。

毛利氏で船手組番頭の役につきました。

(8) おわりに

海賊と言われた村上家の活躍は中世から戦国時代となります。

前期の村上家と後期の村上家のつながりは今一つはっきりしないのですが、後期村上家として戦国時代に勇躍名を馳せた村上武吉が登場します。

三島村上の宗家で能島に拠点を持ちました。

隆盛期は防予、芸予から東は塩飽諸島まで瀬戸内海を支配しました。

伊予の河野氏を主筋としながらも当初自立の傾向が強かったのですが、戦国時代の織田氏、毛利氏、豊臣氏の天下争奪戦の荒波の中で秀吉に海賊行為をにらまれて排撃され、毛利氏の家臣となって行きます。

三島村上の因島村上家ははやくから主家を河野氏から小早川氏から毛利氏の変え、来島村上家は秀吉から毛利氏に変わりましたので、村上三家とも江戸時代は毛利氏の家臣となりました。

古来瀬戸内海の海域の島々の領域があいまいで、島々数が多い立地が複雑で、入江が複雑なため海賊の発生しやすく、大規模な海賊の誕生となりましたが、秀吉による統治が確立かされ、海域の統治はその地の陸と同じ領主に確定させ、海の名は廃止にされたのです（海賊禁止令）。

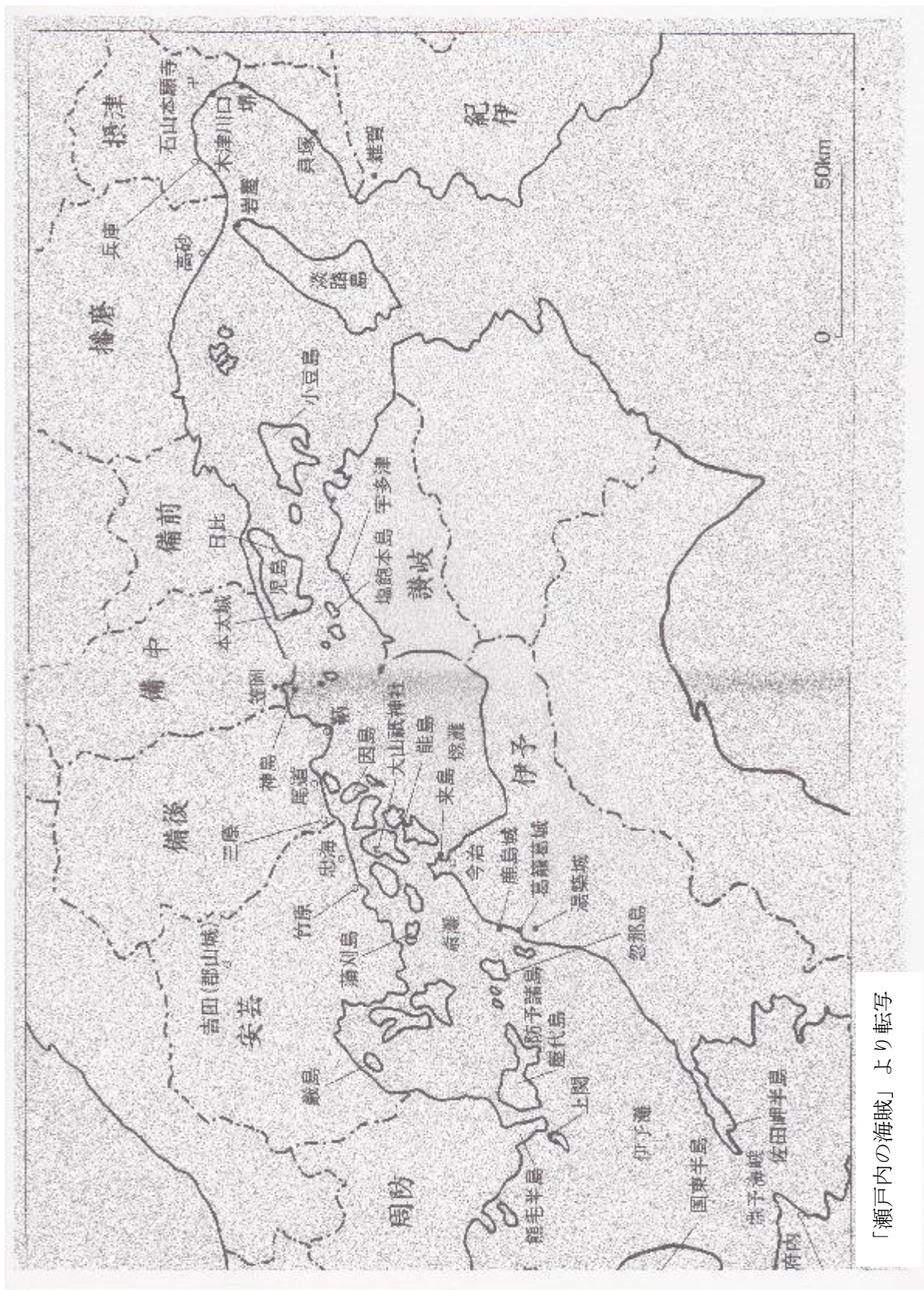
以上

2022年3月14日

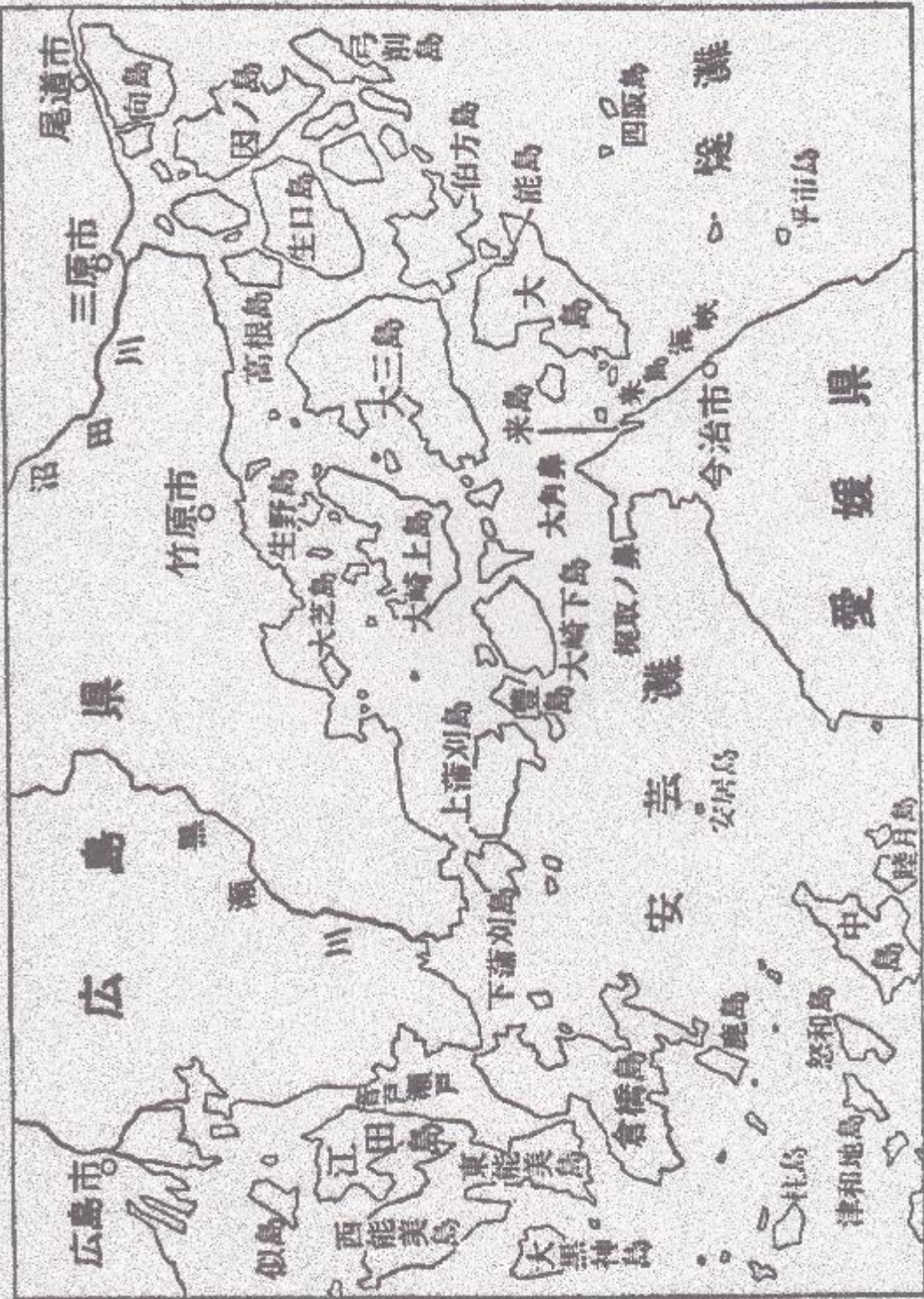
梅 一声

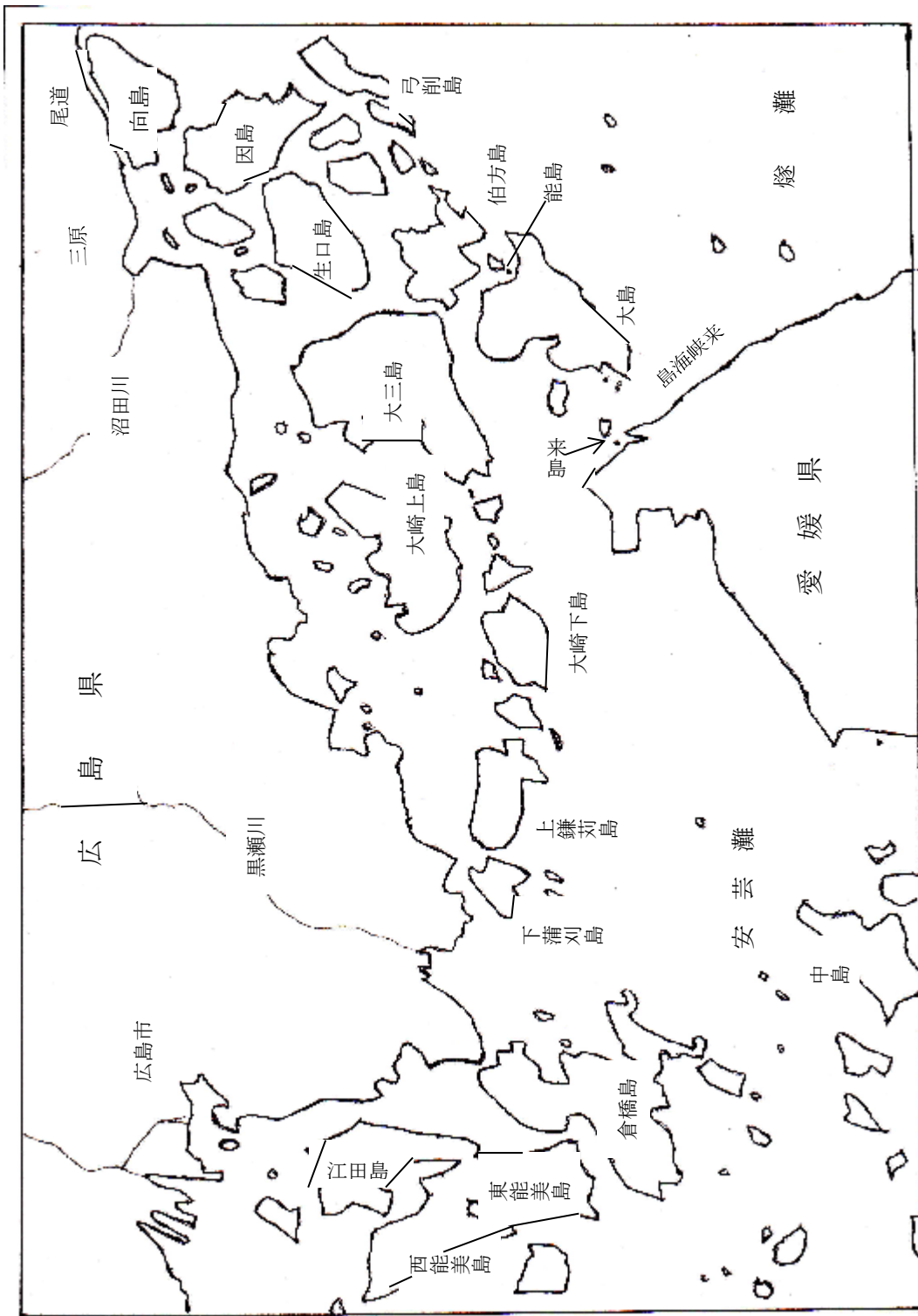
参考資料

- 1, 日本の海賊 村上護 1892 講談社
- 2, 海賊がつくった日本史 山田順子 2017 実業の日本社
- 3, 瀬戸内海 of 海賊 山内譲 2015 新潮社
- 4, 村上海賊の娘 和田竜
- 5, 日本国史大辞典
- 6, 武家万代記 中国史料集 校注 米原正義



「瀬戸内の海賊」より転写





芸予諸島